

以下のシンポジウム原稿は、鳴門生徒指導学会並びに日本コラージュ療法学会に帰属するものである。

シンポジウム原稿「コラージュの授業とコラージュ療法」

大阪府立和泉支援学校 岩岡 眞弘

はじめに

最初に自己紹介をすると、私は高等学校に20年間、特別支援学校には10年間勤務しています。高等学校に勤務している間に生徒指導から臨床心理学やカウンセリングに関わるようになり、考えてみたら今年で20年になります。その間に内地留学で鳴門教育大学大学院にお世話になりました。大学院では生徒指導講座に所属し、高校生のコラージュ273枚の表現特徴について集計調査を行い、「コラージュ療法の基礎的研究—高校生の表現特徴」として修士論文にまとめました。

今日のシンポジウムのテーマは「教育現場におけるコラージュの理解と活用」です。このテーマを聞いたとき、最初に頭を過ぎったのは「教育」と「カウンセリング」の枠組みの違いについてです。内地留学の以前も、大学院で学んでいたその時も、学校の教員であり、かつ臨床心理士であるという内地留学の後も、私にはその「枠組みの違い」は、いつも心のどこかに引っかかっていた。古くからある問題ですが、私にとっては今も続く問題でもあります。

今日はコラージュを切り口に、「教育現場におけるコラージュの理解と活用」の根底にある枠組みの違いについて考えていきたいと思います。私のタイトルにある「コラージュの授業とコラージュ療法」は小鳴門橋の兩岸、あるいは鳴門生徒指導学会とコラージュ療法学会のようなものかもしれません。しかしたとえどのような場面であっても、私は子どもたちの表現から、その気になれば、その子どもの大切な何かを読み取るのではないかと考えています。そしてそこから生徒や子どもの深い理解につながるお話ができればと思っています。

(1) One Side

まず橋の一方についてお話ししたいと思います。最初にこのような「枠組みの違い」について考えるために、特別支援教育における知的障害とはどのように定義されているか、紹介したいと思います。平成14年6月に文部科学省特別支援教育課によって示された「就学指導の手引き」には、知的障害とは「発達期に起こり、知的機能の発達に明らかな遅れがあり、適応行動の困難性を伴う状態」と定義されています。客観的基準を示す法令にあっては、次の3つが基準となるようです(fig. 1)。

①おおむね18歳未満の発達期において遅滞が生じること。(事故の後遺症や認知症といった発達期以後の知能の低下は除外されます) ②遅滞が明らかであること。③遅滞により適応行動が困難であること。

ここでは、「『心の発達』の遅れ」ではなく「知的な遅れ」による行動が問題とされています。適応行動の困難さは、知的な遅れによるものだけではないと思うのですが、ここでは取り上げられていません。

次に「特別支援学校小学部中学部学習指導要領」の第1章「総則」の第1節「教育目標」には、特別支援学校の教育目標は「児童及び生徒の障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服し自立を図るため必要な知識、技能、態度及び習慣を養うこと」と書かれています(fig. 2)。

なかなか文言が難しいのですが、特別支援教育はこのように、「学習上での困難、適応行動での困難を改善・克服」を目指しています。時計を読むことができる、お金の計算や、着替え、買い物ができるようになることが具体的な目標なのでしょう。学習指導要領では目に見える学習や行動面での克服を目指しています。その背景やそれらの困難さにより引き起こされる感情については触れていません(fig. 3)。特に軽度の障害と言われている人の障害があるがゆえの辛さという大問題には触れていません。

また「障害特性の理解」についても述べられていますが、それは行動の変化を目的とした指導を行うための「障害特性の理解」です。内的世界を理解し共有するためのものではないようです。教員の関心は-それが教員の専門性ではありますが-主にその生徒の知的な高さです。ですから特別支援教育におけるアセスメントとは発達検査のここのようです(fig. 4)。ですからバウムテストのようなパーソナリティ検査やコラージュはアセスメントとして、なかなか現場には入りにくいようです。そのような中で、ふとってしまうのは、彼らは支援され変化する存在で、私たちが彼らとの関係を変化させることは、特別支援教育の文言上では述べられていないように感

じます。生徒指導においてカウンセリングを学び始めた頃、「変えようと思うな、理解しようと思え」と先輩に言われたことを思い出します。

そこで思うことなのですが、木部(2006)は、こどもの発達について「神経的発達(認知発達)と心的発達(対象関係)」という2つの部分に分けて考えられる」と述べています(Fig. 5)。発達は車の両輪のように、両者が調和してなされるのだらうと思います。特別支援教育の現場では認知的発達については実践が豊富ですが、心的発達についてはこれからなのだらうなと思います。自立活動には「心理的安定」「人間関係の形成」という区分がありますが、それらはこれから検討される部分なのではないかと思います。

前置きが長くなりましたが、このシンポジウムのテーマとなっているコラージュですが、美術などの授業でも実践されています。例えば美術で「宿泊学習の思い出」という課題でつくられたある生徒のコラージュは、楽しい思い出の写真やパンフレットの切り抜きが貼られています。授業は「〇〇ちゃん、ここにこれ貼ったらどう?」とか「線に沿って切れて、上手だねえ」とかの教師の言葉かけがある中で楽しく展開していったものと思います。でもやっぱり作品は評価の対象となり、多くの場合、作品には教員の指導が入っています。臨床場面のように、コラージュの内容について触れることは、なかなかありません。

しかしそれでもその生徒の特性が明らかにすることもあり、授業での表現がアセスメントになってしまうこともあるようです。ある広汎性発達障害の生徒は「遠足の思い出」で3人の友だちとお弁当を食べている絵を描きました。そこに描かれた友だちはそれぞれ楽しそうな表情をしているのですが、それぞれの視線は交わらず、3人ともどこか違う方向を向いました。彼はいろいろな生徒と関わろうとするのですが、いつもトラブルになっていました。そしていつも最後はパニックになって終わりました彼の人と関われない辛さや孤独が、一見するとその明るい絵の中に表現されていると思いました。

(2) Another Side

そのような「教育」という枠組みの中で、私も教員として働いています。そこである時、思うこともあって、意を決し、コラージュ療法を取り組んでみようと思いました。どこがどうなのか言語化はしにくいですが、明らかに授業とは異なったコラージュを試みようと思いました。支援学校はティームティーチングが基本なので、サブの先生が必ず入るのですが、その先生には美術の授業とは異なることを説明して、「何もしないで下さい」とお願いしました。切り取りも何も指導する気満々だったのですが、ありがたいことに時間を持て余したその先生は自分でコラージュをつくり始めました。何か感じるどころがあったのでしょうか。その先生は切片を台紙に配置して、そのまま貼らずに持って帰りました。私には当然、見せてくれませんでした。

自閉症とダウン症、一般の高校生、それぞれ何となく表現特徴に違いがあるように思えます。ある自閉症の生徒は食べ物ばかり、一定の間隔で台紙に貼った作品をつくりました。エコラリアがあるので、「おいしそうですね」と言うと、「おいしそうですね」と答えてきます。また「同じことを言われても困ります」と言うと、また「同じことを言われても困ります」と返ってきます。「美術」という教科からの観点から見ると、どのように評価して良いのか分かりませんが、つくった本人は、満足して「できました」と言ってきました。

自閉症の生徒の作品は、切片の重ね貼りもなく、それぞれの関連が希薄のように思えます。また切片を羅列しただけという感じもあります。また人物の登場が少ないように思います。作品中に人物がいることはありますが、それを明らかに意識して貼ったという風には思えません。一方、ダウン症の生徒の作品は自閉症のそれとは異なり、作品の切片それぞれにつながりがあり、何か物語があるようにも思えます。特別支援学校の生徒の作品に比べると、一般の高校生の作品は表現も豊かで、強い意志が感じられるだけではなく、何となくユーモアも漂わせています。つくられた作品をじっくりと、それに取り組んだ子どもの顔を思い浮かべながら見てみると、やはり何かその人らしい何かを感じられます。

(3) Center

ここまで橋の両側について、その違いについて語ってきたつもりですが、共通する部分もあるわけです。それはまず、ベタですが教育も心理臨床も人が介して行われる営みです。自閉症で他者とのかかわりを一切排しているような子どもでも、先生とのかかわりが経験になっていると思います。なぜ、人という存在が必要なのか、根源的ですがそのことを考えてみるのが大切なのではないのでしょうか。

そこでこのコラージュをつくっている時の印象的なエピソードがあります。それはコラージュをつくっている

とき、厳密に言えば私が欠伸をしている時のことです。ある生徒はポケモンの切片が欲しかったのですが、なかなか見つからないでいました。その生徒は私に、山積みになった雑誌を指さして、「先生、一緒に探して」と言いました。私はその生徒と雑誌の山の中からポケモンの絵を探しながら、何か一緒にすごく大切なことをしている感覚になりました。私は一体何なのだろうと、その時ふと頭に過りました。その時の私は、学校の先生であったのかセラピストであったのか、その辺りに教育現場でのコラージュの活用に関して、答えがあるように思います(fig. 6)。ご清聴ありがとうございました。

<参考文献>

木部則雄, 2006, 「こどもの精神分析-クライン派・対象関係論からのアプローチ」, 岩崎学術出版